

制服を利用した衣生活教育カリキュラムの提案

後藤 景子・山中 綾美*

Proposal of the curriculum for clothing and textile education using school uniform

Keiko GOTOH and Ayami YAMANAKA*

Accepted July 2, 2008

抄録 : 衣服の消費過程の観点から、健康で快適な衣生活を営むために習得すべき基本的知識や技能として、着用目的、素材、加工、縫製、着方、手入れ、補修、収納、およびリサイクルを取り上げた。高等学校家庭科において、標準授業時数の範囲内で衣生活全般に関わる系統的な学習を保证するために、制服を利用した衣生活教育カリキュラムを構築した。提案された学習内容は具体的、かつ衣生活全般で実践可能であり、今後の活用が期待される。

索引語 : 制服, 衣生活学習, 衣服の消費過程

Abstract : From the viewpoint of clothing consumption processes, the purpose of wearing, textile materials, textile processing and finishing, sewing, coordinates for wearing, maintenance, repair, reserve, and recycle were proposed as fundamental study contents of clothing life practice. To guarantee systematic courses of study within total class time, we constructed a curriculum for clothing and textile education in senior high school using school uniforms. The study contents in the curriculum obtained were specific. In addition, it was expected that students in senior high school would carry out in practice what they have learned in their daily clothing life.

Key Words : school uniform, clothing life practice, clothing consumption process

* 富士通アドバンストソリューションズ

1. はじめに

家庭科は生活者として自立する能力や家庭を築き経営していく能力を育て、さらに変化する社会に主体的に対応して、新しい生活文化の創造に取り組む意欲と態度を育てる役割を担っている¹⁾。この役割を果たすために、衣・食・住・家族関係を中心とした家庭生活の現状を十分把握した上で、生活上必要な基本的知識や技能を学習させ²⁾、家庭生活での実践に向けて指導していく必要がある³⁾。

現代の衣生活は、既製服の選択・購入に始まり、着用、手入れ、補修、収納、リサイクル・廃棄など様々な消費過程からなり、これらを円滑に行なうために習得すべきことが多くある。これらに加えて、着用目的、素材、加工、縫製など衣服や衣生活に関する基本的知識や技能が必要であり、衣生活全体を計画的に遂行することも重要である。このように、合理的な衣生活を営む能力を育成するために学習させるべき内容は多岐にわたる。

子どもの発達段階を考えると、小学校では衣服や衣生活に関する興味・関心を育てることが重要である。その上で中学校や高等学校での系統的な学習が可能となり、習得した内容が定着すれば、生活者としての自立を支援するものとなる。しかしながら、家庭科の授業時数は、衣服や衣生活に関する全ての内容を網羅的に学習させるのに十分ではない。例えば、京都府下の小中学校の家庭科の授業実態に関するアンケート結果⁴⁾によると、小学校では製作に多くの授業時数が割り当てられており、学習指導要領上教えなければならない学習内容が完全に実施されていない場合がある。中学校（必修）では、「衣服の着用目的」「衣服材料の性質」および「衣服の手入れ・洗濯」を除く学習内容が実施されていない場合がある。このような現状を考えると、少ない時数で衣生活全般にわたる学習を保証するには、全ての衣服アイテムを対象とするよりも、特定の衣服を取り上げて生活での実践と並行しながら学習するのが効果的であると考えられる。

そこで本研究では、制服を利用した衣生活学習内容を提案する。現在、日本の中学校や高等学校の多くは制服の着用を義務づけている。最も身近な制服についての知識や管理能力を身につけることは、自立した生活を営む上での出発点である。また、対象とする衣服を着用し観察しながら学習することは具体的で理解しやすく、学習したことがすぐに実践可能である。そこで、学習指導要領における衣服・衣生活に関連した学習内容から、衣の消費過程で必要な事項を選択し、各事項の学習に制服を利用する衣生活教育カリキュラムを構築する。

2. 学習指導要領の内容と衣の消費生活

中学校および高等学校家庭科被服領域に関する学習指導要領の内容を整理したものを表1に示す。中学校では衣服の働き、材料、選択、構成、製作、着装、手入れ、補修が主な内容となっている。高等学校では、これらに加えて衣文化、立体構成と平面構成、被服材料の性能と加工を履修させるようになっている。

表1 学習指導要領における被服領域の学習内容

校種・教科・科目・分野	学習項目	学習内容
中学校 技術・家庭 家庭分野	衣服の選択と手入れ 簡単な衣服の製作	・衣服と社会生活とのかかわりを考え、目的に応じた着用や個性を生かす着用を工夫できること。 ・日常着の計画的な活用を考え、適切な選択ができること。 ・衣服材料に応じた日常着の適切な手入れと補修ができること。 ・日常の衣服に関心を持ち、身体を覆う衣服の基本的な構成を知ること。 ・簡単な衣服の製作について課題を持ち、計画を立てて製作できること。
高等学校 家庭基礎	家族の生活と健康 衣生活の管理と健康	・家族の衣生活に必要な基礎的な知識と技術を習得させ、家族の生活を健康で安全かつ快適に営むことができるようにする。 ・被服の機能と着装、被服材料、被服管理などに関する基礎的な知識と技術を習得させ、家族の衣生活を健康で快適に営むことができるようにする。
高等学校 家庭総合	生活の科学と文化 衣生活の科学と文化 生活文化の伝承と創造	・衣生活を科学的に理解させるとともに、衣に関する先人の知恵や文化を考えさせ、充実した衣の生活を営むことができるようにする。 ・被服材料、被服の構成、被服製作、被服整理などについて科学的に理解させるとともに、衣生活の文化に関心をもたせ、必要な技術を習得して充実した衣生活を営むことができるようにする。 ・衣にかかわる生活文化の背景について理解させるとともに、生活文化に関心をもたせ、それを伝承し創造しようとする意欲をもたせる。
高等学校 生活技術	衣生活の設計と製作 被服の機能と着装 被服の構成と製作 衣生活の管理	・被服の着装、製作、管理などに関する知識と技術を習得させ、充実した衣生活を営むことができるようにする。 ・被服の機能と着装について理解させ、被服計画を考えて被服を適切に選択し、着装できるようにする。 ・体型や動作と被服とのかかわり及び立体構成と平面構成の特徴について理解させ、デザインに応じた適切な被服材料の選択ができるようにするとともに、製作技術の習得を図り、被服の製作ができるようにする。 ・被服材料の性能と加工、被服の管理などについて理解させ、健康や安全に配慮した衣生活の管理ができるようにする。

このように、現行の学習指導要領の内容は、衣服の購入・消費過程で必要な着用目的、素材、加工、縫製、着方、手入れ、補修、収納、廃棄・リサイクルをほぼ網羅している。この中で縫製に関しては、技能習得を目的とした被服の製作を課している。日本の家庭では、第二次世界大戦後の一時期までは衣服は家庭で生産するのが一般的であり、これに対応して家庭科においても被服製作実習に重点がおかれていた⁵⁾。ところが1960年代以降は既製服の時代となり、今では家庭内で被服を生産することが殆どなくなった。したがって、衣生活に必要な基本的な知識や技能という観点からは、被服の製作はもはや必須ではないと考えられる。もちろん、衣服製作の体験は、衣服に関する興味関心や理解を助長し、衣服の購入や補修に役立つ知識や技能の習得につながる⁶⁾。手先の訓練や達成感を味わう「ものづくり教育」としても一定の意義はある⁵⁾。しかしながら、被服製作に多くの時数が必要であることを考慮すると、衣生活に最低限必要な事項の学習を優先させるほうが順当であると考えられる。

本研究では、衣生活に必要な基本的知識と技能の習得を目的として、衣服の消費過程で必要な上記の事項を制服を通して系統的に学習させるカリキュラム構築を行なう。学習指導要領の範囲と消費者としての自立の観点から、高等学校家庭科を対象とし、学習した内容を生活実践につなげることに留意した。

3. 学校における制服の歴史と現状

制服（ユニフォーム）とは、フォーム（型）をユニ（質・画一）することにより、着用者の意識や態度を画一化・均一化し、分散や逸脱を防止するために、兵士の服装として導入されたものである。学校においても、シンボル、アイデンティティの確立、行動や規律の改善、連帯感やコミュニケーションの促進などのために、制服の着用が義務づけられるようになった⁷⁾。日本では、1886年に、海軍士型制服とほぼ同じ形の男子制服が高等師範学校で制定された。女子では明治期以降もしばらく和装であったが、1906年にセーラー型上着とスカートからなる文部省モデル案が紹介され、1920年に平安女学院が採用した。1930年頃には女子の制服も完全に洋装化し、詰め襟やセーラー服が昭和の学生服の定番となった。

1985年頃から、制服の上着が詰め襟やセーラー服からブレザー型へと変化し、この傾向は高等学校で顕著となった。色柄の主流は、最初は上下ともに紺色が多かったが、その後、ズボンまたはスカートがグレーや柄物となった。5年前からは再び落ち着いた配色となり、上下共布のスーツ形式が増加してきている。大手制服メーカーが2007年に全国の高等学校108校を対象に制服のデザインの調査を行った結果によると⁸⁾、男子詰め襟は11%、女子セーラー服は5%であり、残りはブレザー型であった。

2001年に首都圏で高校生を対象として実施された制服の着装行動に関するアンケートの結果⁹⁾、制服を採用している高校の生徒で制服を着用したいと答えた割合は男子で71%、女子では88%となり、大半が制服の着用に関して肯定的な回答をした。1974年に福岡県で保護者も含めて行なったアンケート調査¹⁰⁾では、肯定的な回答が93%であり、長年に亘り制服肯定派が大多数を占めていることが示唆される。制服を着用したい理由として、男女ともに「学校に着ていく服を迷わずに済む」や「気軽だから」が圧倒的に多かった⁹⁾。この結果は、高校生が制服をそのまま受け入れている傾向を示している。しかしながら、制服の実際の着用に際しては、スカートの裾切りや巻き上げ、シャツの裾出し、スラックスの腰履き、ネクタイの位置のずらしなどといった制服の着崩しが常態化している¹¹⁾。着崩しの動機には規則に縛られることから逃避したいという思春期の反抗や生徒同士の集団意識がある。一方で、着崩しは生徒のおしゃれ心に由来する自己表現のための着装行動であると捉えることもでき、制服にファッション性が求められていることの現れであると理解できる¹²⁾。

制服は学校での学習活動のために毎日着用するばかりでなく、カジュアルな生活もカバーし、冠婚葬祭などの儀式で着用可能なオールインワン型衣服である。制服は長年に亘り機能性、耐久性、ファッション性を追求して工夫・改良され、現在では極めて完成度の高い衣服の一つとなっている¹³⁾。

4. 制服を利用した衣生活学習の内容

3で述べたように、制服は集団の標識を目的とした画一的な衣服で、学校での学習活動のために着用するなど他の日常着とは異なる特質をもっている。3年間の着用を考え、取り扱い易さ、活動性、安全・衛生、機能性、人体サイズの変化、着崩し、着用や洗濯に対する耐久性¹⁴⁾など様々な観点から、素材や縫製において適切な選択や工夫がなされている。また、その構成は、ブレザー、ズボン、スカート、シャツ、ブラウスなど、代表的な衣服アイテムを包括している。制服は下着、靴下、ニット製品、外衣などと組み合わせてほぼ毎日着用するので、着装、手入れ、収納などに多くの留意点を要する。廃

棄やリサイクルに関しては、同じ衣服を一括回収できることから、幅広い方法が提案できる。さらに、代表的な衣服アイテムで構成されているため、学習したことがその他の衣服に応用でき、衣服・衣生活全般に必要な知識と技能の習得へと発展可能である。このように、制服を利用して学習可能な内容は多岐に亘り、かつ消費者教育的な要素が強い。この観点から、表 2 に示す高等学校家庭科を対象とした学習内容を提案する。この学習を実施する上で取り扱う制服はブレザー型とし、教材として準備する。

表 2 制服を利用した高等学校家庭科の学習内容

学習項目	学習内容	学習形態	指導上の留意点
目的	・ 所属集団の表示 一般的な制服の着用意義 ・ 学校における活動 身体的要因と精神的要因 ・ 社会的慣習や冠婚葬祭 学校以外の公式の場でも着用可能	講義・演習	制服は学校のシンボルであるだけでなく、身体的・心理的・社会的に多くの役割を果たすことを理解させる。
素材	・ 色 紺、グレー、黒 ・ 繊維 ブレザー、ズボン、スカートでは羊毛／ポリエステル混紡 シャツ、ブラウスでは綿／ポリエステル混紡 ・ 布構造 織物	講義・観察	制服の要求性能の観点から、色、繊維、布構造との関係を理解させる。
加工	・ 形態安定加工 しわ、型くずれを抑制 ・ 透け防止 TPO、美観 ・ ストレッチ加工 フィット性、動作適応性 ・ 抗菌抗臭加工 清潔を保つ ・ 紫外線カット加工 安全性、快適性 ・ 透湿撥水加工 防水性や防汚性	講義・観察	制服の要求性能のうち、美観、着心地、メンテナンス性をより向上させるために、様々な加工が行なわれていることを理解させる。
縫製	・ 肩パット 型くずれ防止 ・ 立体的裁断 フィット感 ・ ポケット 機能性、利便性 ・ 前開き 機能性、着脱のし易さ ・ 袖口の長さ調節 成長による人体寸法変化に対応 ・ 着崩し対策 スカートの裾に校章 スカートのウェスト部分に板	講義・観察	制服の要求性能を考慮して、構成や縫製に様々な工夫が行なわれていることを理解させる。既製服を選択・購入する際のポイントと関連させる。

付 加 価 値 な機能	・ 高強力繊維 身体保護機能 ・ GPS 装着・カード機能 利便性	講義	制服に関する話題提供を行ない，学習への興味関心を高める。
着用	・ 皮膚の清浄 肌着や靴下 ・ 体温調節 ベスト，セーター，カーディガン，コート，マフラー ・ 着崩し TPO，規範	講義・演習	学校で心身ともに快適に過ごすため，制服の着用上留意すべき点を考えさせる。
毎 日 の 手 入 入	・ 整形・乾燥 ハンガー使用 ・ ブラッシング ほこりの除去，布目に沿わせる ・ 点検 ポケット，しみ，臭い，ボタン，ほころび	講義・生活 実践	着用後の手入れが最も基本であり，重要であることを認識させる。
しみ抜き・ 漂白	・ しみ抜きの原理 液体を用いてしみ汚れを移し出す ・ しみ汚れの溶解性と液体の種類 水，洗剤水溶液，有機溶剤 ・ 漂白剤の種類と用途 繊維の種類，色柄の有無による使い分け	講 義・実 習・生活実 践	しみはついたらすぐとることと，しみ抜きの原理を理解させる。漂白剤の選び方と取り扱い上の注意事項を理解させる。
修繕	・ 毎日点検 ボタンのとれかけやほころび ・ 修繕方法 ボタンつけ，まつり縫い，かがり縫い	講義・生活 実践	毎日の点検とすばやい対応が重要であることに気づかせる。
洗濯	・ 衣料取り扱い表示の確認 家庭洗濯またはドライクリーニング ・ 別洗い ネクタイ，リボン，詰め襟 ・ 部分洗い ブラウスやシャツの襟や袖口 ・ ポケットの中味点検 ・ 整形 ボタンやファスナーを止める ・ ネット使用 ブレザー，ズボン，スカート ・ 機械力の選択 洗濯機洗い（弱水流） ・ 洗剤の種類 ブレザー，ズボン，スカートでは中性洗剤使用 ・ 水温 ブレザー，ズボン，スカートでは 30℃以下 ・ 遠心脱水 30 ～ 60 秒程度 ・ 干し方 しわの除去，整形，陰干し	講義・実習	制服の洗濯方法が，一般的にデリケートな衣料の洗濯に適用できることを理解させる。

アイロン 仕上げ	・ 温度 中低温 ・ スチーム ・ あて布の使用 ・ 順序 小さい部分から全体（袖、襟、見頃の順） ・ てかり部分 ぬれタオル使用 ・ スカートのひだ 平ゴムで押さえ	講義・実習	美しく着用するために、アイロン仕上げが有効であることを理解させる。
長期収納	・ 汚れや水分の除去 洗濯後十分乾燥 ・ 整形 ハンガー使用 ・ 保管場所 広く乾燥した場所 ・ 防虫剤 羊毛混の素材	講義・生活 実践	制服は着用中のみならず、収納中にも損傷することを理解させる。
リサイクル	・ 中古衣料 学校内で譲渡 ・ ケミカルリサイクル 一括回収	講義・演習	衣服を大切にする心やゴミ問題への興味関心を育成する。

まず、制服の着用目的を取り上げる。グループ毎に話し合い、所属集団の表示については学校以外の制服も含めてその意義を考えさせる。学校における活動については身体的要因のみならず、学校の一員としての自覚、連帯感、行動や規律の改善、コミュニケーションの促進などの精神的な効果にも気付かせる。また、制服は学校以外の公式の場でも着用でき、汎用性が高いことを理解させる^{13, 15)}。

制服は、その目的を果たすのに適切な素材の選択や縫製上の工夫がなされている。ブレザーとズボンまたはスカートの布地は、学校という集団の標識として、紺、グレー、黒などの落ち着いた色の比較的厚地の布でかっちり仕立てられている。毎日着用することから、丈夫さ、着心地、取り扱いやすさなどを考慮して、布を構成する繊維がブレザー、ズボン、スカートでは羊毛／ポリエステル混紡、シャツ、ブラウスでは綿／ポリエステル混紡となっていることを説明する。綿、羊毛およびポリエステルは衣料用繊維の中でもとくに重要であり、これらの繊維の性質や用途について理解させる。また、形態保持性や丈夫さを考慮し、布構造が編物ではなく織物になっていることを理解させる。さらに、美観、着心地、メンテナンス性を向上させるために、形態安定加工、ストレッチ加工、抗菌抗臭加工などの各種加工が施されている^{13, 16)}。縫製に関しても、丈夫さ、着心地、機能性、寸法変化、着崩しなどを考慮して、様々な工夫がなされていることなどを紹介する¹³⁾。以上の素材や縫製についての学習は、制服を観察しながら行ない、既制服を選択・購入する際に役立つ基本的知識として定着させる。さらに、話題提供として、GPS 装着、ID カード機能、クレジットカード機能など最近の付加価値的機能を備えた制服の紹介を行なう¹³⁾。

着用に関しては、被服の着用目的と対応させて、各自がどのように着方を工夫しているかを発表させる。とくに夏服と冬服の着用上の留意点を整理させ、皮膚の清浄を保つために肌着や靴下、体温調節のためにベスト、セーター、カーディガン、コート、マフラーなどと組み合わせて制服を着用していることを認識させる。さらに、TPO と関連して着崩しの問題点についてふれ、学校生活を心身とも

に快適に過ごすために、どのようなコーディネートや着用バランスが適切なのかを考える。

3年間制服を外見的に美しく、かつ清潔に着用するために、毎日の手入れは欠くことができない。着用後は厚みのあるハンガーに吊るして整形・乾燥し、ほこりを除去するために布目に沿って上から下へブラッシングすることが基本であることを理解させる。このとき同時に、ポケットの中味、しみ、臭い、ボタン、ほころびの点検ができることに気づかせ、これらに対する対処方法を学習する。局部的についた目立つ汚れであるしみを除去するためには、液体を使って汚れを他の布に移しとりしみ抜きが必要であり、しみ汚れの溶解性により水、洗剤水溶液または有機溶剤の中から適当な液体を選ぶ。このようなしみ抜きの原理を理解させた上で、具体的なしみの種類と処理法を表にまとめる。しみが除去できないときは色素のみを無色化する漂白が必要となる。漂白剤の種類と用途について解説し、使用上にあたっては十分な注意が必要であることを喚起する。しみ抜きや漂白に関しては、制服のサンプル布を利用して実習を行なう。ボタンのとれかけやほころびには早めの対応が大切であることを認識させ、修繕のために必要なボタンつけ、まつり縫い、かがり縫いなどの手順を確認する。学習後に各自制服を点検し、家庭で必要な手入れを実践する。

制服には定期的な洗濯が不可欠である。家庭洗濯と商業ドライクリーニングのいずれを選ぶかは衣料取り扱い表示を参照にするが、シャツやブラウスはもちろんのこと、ブレザー、ズボン、スカートでも羊毛の混用率が高くないものについては家庭洗濯で対応できることを周知させる。次に、制服を家庭で洗濯する際の留意点について説明し、理解させる。ネクタイ、リボン、詰め襟は別洗いし、汚れの激しいところ（ブラウスやシャツの襟や袖口）は固形石鹼を使って部分洗いをする。ポケットの中味を点検する。ブレザー、ズボン、スカートではボタンやファスナーを止めて整形してネットに入れ、洗濯機（弱水流）を用い、中性洗剤で30℃以下の温度で洗う。手洗いには相当の技能を必要とする一方、近年は洗濯機の改良が進み衣服の損傷が抑えられるようになったので、ここでは洗濯機の使用を推奨する。遠心脱水は30～60秒程度でよいこと、脱水後はすぐにしわの除去、整形して陰干し（平干しまたはハンガー干し）することを順次説明しながら、制服の洗濯方法が一般的にデリケートな衣料の洗濯に適用できることを理解させる。洗濯後のアイロン仕上げに関しては、一般的注意として、中低温であて布やスチームを使用し、小さい部分から全体へとかける（例えばブラウスでは袖、襟、見頃の順）ことを説明する。さらに制服に特有の事項として、スカートやズボンの「てかり」の部分にはぬれタオルをかけ、スカートのひだは平ゴムで押さえるなどのアイロン仕上げの工夫等を説明する。以上の点に留意して、制服の衣料取り扱い表示を確認し、洗濯・アイロン仕上げ実習を行なう。

制服は季節に応じて夏服、冬服、合い服などがあり、季節外のを数ヶ月以上に亘って収納する必要がある。そこで、制服の損傷を抑える収納のポイントとして、洗濯後十分乾燥させること、ハンガー使用して整形し、広く乾燥した場所に収納すること、羊毛混のものは防虫剤を使用することなどを説明する。家庭での収納方法の見直しを行ない、問題点があればすぐに改善を行なうことを課題とする。

日本における衣服のリサイクル率は今だ10%未満であり、容器包装リサイクル法など各種リサイクル法の対象品と較べて著しく低い。その理由の一つは、衣服は素材、付属品、形態などが多種雑多で、画一的な回収やリサイクルが難しいためである。一般的な衣服のリサイクル方法を紹介し、制服は、損傷の少ないものは下級生に譲渡するなどして学校内で再使用でき、計画的に生産して一括回収すればケミカルリサイクルも可能であることを理解させる。関連して、生産者、生徒、保護者、学校が一体となって制服のリサイクル活動を推進させる構想について話し合い、可能ならば具体的活動へと発展

させる。このようにして、衣服を大切にする心やゴミ問題への興味関心を育成する。

以上、本研究で構築した制服を利用した衣生活学習の内容（表 2）は、高等学校家庭科被服領域に関する学習指導要領（表 1）の内容のうち、衣文化と製作技術の内容を除く殆どを網羅している。この学習に必要な時間数は、制服以外の衣服全般に関する内容をどの程度まで包括的に扱うかによって異なるが、各学習項目の講義等は 1 ～ 2 項目あたり 1 時間程度とし、実習に必要な時間を加えて 10 ～ 15 時間と試算できる。したがって、家庭科の単位数（家庭基礎 2 単位、家庭総合 4 単位生活または生活技術 4 単位）内で学習可能である。また、学習内容を制服に限定して時間数を大幅に短縮すれば、家庭科学習の導入に利用して動機づけを図る、学習後の総括に利用して定着を図るなど、様々な利用法が期待できる。

5. さいごに

衣服の消費過程の観点から、衣生活に必要な基本的知識や技能習得を目指して、制服を利用した高等学校家庭科被服領域のカリキュラムを構築した。このカリキュラムを試行するための具体的な授業案づくりを今後行ないたい。授業案づくりに関して、衣服や衣生活への興味・関心を高めるための工夫が今後の課題となろう。制服は生徒の保護者にとっても身近なものである。今後はこの学習内容を消費者教育へと発展させて衣の消費に関する知識や理解の普及に努め、心身ともに健康で快適な衣生活の実現につなげたい。

文献

1. 高部和子, 学校教育と家庭科教育, Asset ビジュアル家庭科教育実践講座第 1 巻, ニチブン, 1998, pp. 22-27
2. 朴木佳緒留, 家庭科教育の原点を考える, 家庭科教育, 75 巻, 9 号, pp.6-10, 2001
3. 中西雪夫, 家庭科の学習内容の実践化の定着時間ー学習内容の家庭生活における実践率の変化ー日本家庭科教育学会誌, 42 巻, 4 号, pp.15-22, 2000
4. 後藤景子, 菊地志乃, 現代的家庭科教育ニーズの探究と衣生活領域の学習内容の構築, 京都教育大学紀要, 109 号, pp. 63-71 (2006)
5. 高木直, 被服製作の今日的意義, 家庭科教育, 75 巻, 3 号, 家政教育社, pp.12-16, 2001
6. 岩崎雅美, 被服実習教育から学ぶものー服飾の見方・考え方の視点からー, 家庭科教育, 76 巻, 1 号, pp.64-68, 2001
7. 西川正之, 制服についての社会心理学的考察, 繊維製品消費科学会誌, 40 巻, 7 号, pp.429-435, 1999
8. 株式会社トンボホームページ, <http://www.tombow.gr.jp/school/index.html> (2008 年 2 月 27 日)
9. 土屋みさと, 堀内かおる, 制服および着装行動に関する高校生の意識, 日本家庭科教育学会誌, 48 巻, 2 号, pp.141-148, 2005
10. 石橋葉子, 制服に関する調査 (第 1 報)ー制服の嗜好に対する保護者の意見 (福岡県)ー, 衣服学会雑誌, 19 巻, 1gou, 1 号, pp.9-19, 1976

11. 尾崎商事株式会社ホームページ, <http://ozaki.jp/products/seminar/?r=1> (2008 年 2 月 27 日)
12. 福村愛美, 高校生の制服に対する意識と学校教育との関連性について, 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 32 巻, pp.123-130, 1994
13. 佐野勝彦, スクールウェアの沿革と最近事情, 繊維製品消費科学会誌, 47 巻, 7 号, pp.396-413, 2006
14. 三井紀子, 酒井豊子, 3 年間着用後の女子学生服布地の性能, 家政学会誌, 32 巻, 6 号, pp. 450-462, 1981
15. 鎌谷正弘, ユニフォームは魔法の衣装, 繊維製品消費科学会誌, 47 巻, 2 号, pp.116-121, 2006
16. 上甲恭平, 表面加工を中心とした繊維の機能加工, 繊維機械学会誌, 58 巻, 8 号, 274-281, 2005